

# “希代の天才”<sup>わけ</sup>が誕生した理由

岡田卓 — 出版企画編集者

『バードは生きている』 ロス・ラッセル 著 池央耿 訳/草思社/1985年



天才が歩んだ人生を記録に残した評伝本はこの世に少なくない。当たり前だが、その天才が活躍したフィールドに詳しくれば詳しいほど、興味深く読み進めることができる。私にとって「ジャズ」の世界は、黒人ギタリストであるウエス・モンゴメリーをこよなく愛した父親の影響もあって、未知の分野ではなかったものの、その体験・知識はいずれも素人と言ってよかった。当然、チャーリー・パーカー（愛称：バード）の存在も知らなかった。

初めてその名前を聞いたのは20代半ば、いまから35年ほど前のことになる。当時の職場の先輩が、バードに心酔していた。飲み連れて行ってくれれば、必ずバードの話が聞かされた。卓越した技術と人間離れた集中力を駆使して、一瞬の感覚の冴えでカッコいいフレーズをアドリブで演奏すること。それは即興ゆえに毎回変わる。そして、その演奏に触れた人であれば、誰もが心を驚づかみにされること——などを知った。

その先輩は定期的にかセットテープをくれた。もちろん、バードの演奏した楽曲をセレクトして編集したものである。お気に入りのアドリブが施された名演奏が録音されていた。先輩曰く、「同じ曲であっても、いつ・どこで・だれとセッションしたものか、演奏を聴いただけでその違いがわかる」という。まさに、日本でも有数の“バードマニア”であった。

バードの人生を描いた評伝本は何冊もある。そのなかで、『バードは生きている』を読んだのは、先輩が愛読していたからだ。何百人にもものぼる関係者からの綿密な取材をもとに完成したこの本には、バードの生きざまはもとより、同じ時代を生きた多くの人々や、明暗分かれる時代の移ろいなども、きわめて丁寧かつ詳細に描かれていた。そして、希代の天才であるバードがどのように誕生したのかを、教えてくれる。

バードの母・アディーは、家出した夫をよそに毎日の夜勤を厭わず、一人息子のための教育にお金を注ぎ、音楽の才能を知ると、進学のための貯金をはたいてアルトサクソフーンを買って与えた。この愛なくして、バードは生まれなかった。

1930年代のカンザスシティ（ミズーリ州）は全米でも有数のジャズの街で、多くの優れたミュージシャンたちが毎夜演奏を繰り広げていた。そのなかで、年齢をごまかしてジャズクラブに潜り込み、ジャムセッションをかぶりつきで見る毎日を送る、という経験がなければ、その後のバードは存在しなかった。

楽器店からリードを万引きした際、「盗みはするな。人を悪く言うな。ホーン（サッ

クス）を離すな。良い女を見つけて、浮気はするな」という“4つの規則”を叩き込まれる。この良き師に出会わなければ、バードのその後の人生は逸脱したものになった。

時代と環境を味方に出現した“ジャズの神様”は、その後の過酷ともいえる時代と運命の変化と闘いつつ、太くて短い人生を閉じた。🎵